

Title	コリンズ社会学再考：相互行為儀礼の理論と小集団過程の分析枠組
Sub Title	A review of Collins' sociology : a theory of interaction ritual and an analysis of small group process
Author	加藤, 慶一郎(Katō, Keiichirō)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2023
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.28 (2023. 7) ,p.19- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20230701-0019">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20230701-0019</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## コリンズ社会学再考 ——相互行為儀礼の理論と小集団過程の分析枠組——

A Review of Collins' Sociology:  
A Theory of Interaction Ritual and an analysis of small group process

加藤 慶一郎

### 1. はじめに——社会学者としてのコリンズ

本稿は、米国の社会学者ランドル・コリンズの理論的営みを「相互行為儀礼」の理論を中心として把握し、その社会学的意義を再評価する試みである。

今日わが国においてコリンズの名前が知られているのは、なによりも『脱常識の社会学』の著者としてであろう。しかしながら、この著作が社会学の入門書・概説書として長年親しまれるいっぽうで、他の邦訳された著作（『マックス・ウェーバーを解く』『ランドル・コリンズが語る社会学の歴史』など）の性格ともあいまって、該博かつ雄弁な解説者のイメージのみが定着し、彼自身の社会学的営為の内実にはほとんど関心が払われてこなかった。

本稿の理解では、コリンズの社会学理論には、大別して3つの主題がある。それは、[1] 社会的コンフリクトおよび階層化の理論、[2] ミクロ-マクロリンク論を下敷きにした社会学的諸理論の総合、[3] 社会的儀礼の理論、である。このうちわが国では、地位達成をめぐる教育社会学的な文脈でかろうじて [1] の主題が言及される（片瀬 2013: 61-5）ほかは、アンソニー・ギデンズが自らの「構造化理論」にたいする仮想敵のひとつとしてコリンズの [2] ミクロ-マクロリンク論を位置づけた（Giddens 1984=2015: 174-7）ことが知られている程度であり、[3] の儀礼理論はほとんど無視されている<sup>1)</sup>。

また、英語圏の文献のいくつかでは、コリンズへの言及に際して儀礼論が中心に据えられてはいるものの、「相互行為における動機づけの理論」（Turner 1987）や「エスノメソドロジーの社会学的特長」（Hilbert 1990）、「道徳性の社会学」（Stets and Carter 2012）など、それぞれの関心に限定された部分的な理解に止まっており、コリンズ理論の全体像を把握してその有効性を検討するような作業は為されていない。

このような現状にたいして本稿では、以下の手順でコリンズの世界観の紹介と再評価を試みる。まず、先行する社会学的儀礼論を彼がどのように吸収して、自らの儀礼分析のモデルを構築したのかを検討する [2章]。つづいて、この儀礼論とその他の社会学的主題（「階層化」と「ミクロ-マクロリンク」）との連関を明らかにすることによって、コリンズ社会学の主要な骨格を提示する [3章]。そのうえで、彼の理論がとくに表出的な小集団を対象として、その集団過程を分析する枠組として有効であることを主張する [4章]。最後に、コリンズの世界観が前提とする方法論について、経験的研究への接続の視点から論じたい [5章]。これらの作業を通じて、たんなる解説者や批評家

ではない、「社会学者」としてのコリNZ自身の独自性と可能性が明らかになるだろう。

## 2. 儀礼分析のモデル——「過程」の視座と「変数」の導入

### (1) コリNZ理論の出発点——デュルケムとゴッフマン

コリNZの儀礼分析モデルが前提とするのは、エミール・デュルケムおよびアーヴィン・ゴッフマンの儀礼論である。しばしばこの3者は社会学的儀礼理論の学説史のなかで並置されるものの、前者2者とコリNZとの異同が明確にされることはなかった (Stets and Carter 2012: 121-2)。いっぽうコリNZ自身は、「私の意図は、単純に『デュルケムとゴッフマンに戻れ』ということではない」(Collins 2004: 8) と述べている。その意味するところを明かす前に、まずデュルケムおよびゴッフマンの儀礼論の要点を簡単に確認してみよう。

デュルケムの儀礼論は、基本的に「未開」の氏族社会における宗教的儀礼を論じたものだと言ってよい。ここでの儀礼は、「人が聖物に対してどのように振舞うべきかを規定」(Durkheim 1912=1975a: 77) する行動様式である。彼は、氏族社会における「聖なるもの」であるトーテム的事物にたいする態度に応じて「消極的儀礼」と「積極的儀礼」という分類を設けるが、それらはいずれもトーテムの聖性への尊崇の表現である (Durkheim 1912=1975b: 165; 317)。つまり、消極的儀礼はトーテム的事物への接触や接近を禁忌とすることでその聖性を保護するいっぽう、積極的儀礼においては供犠や模倣を通して聖なる存在との一体化が試みられる。

デュルケムの儀礼論において肝要なのは、このように扱われるトーテム的事物の本質にかんする議論である。デュルケムによれば、儀礼において為されるトーテムへの礼拝は、たんにその事物そのものの礼拝ではない。それぞれのトーテム的事物は各氏族社会に固有のものであり、それゆえその氏族社会の象徴として「各氏族が互いに区別するための徴」(Durkheim 1912=1975a: 372) ともなる。デュルケムにおける儀礼とは、トーテム的事物への礼拝を通して、自身が所属する社会の聖性を再確認する集合的行動なのである。

いっぽう、ゴッフマンの儀礼論が主題化するのは、近代社会における日常的な相互行為である。それが世俗的でインフォーマルなものにもかかわらず、「儀礼」として論じられるのは、その行動が「その人にとって特別の価値をもっている対象を面前にして、自分の行為の象徴的意味合いをその人が意図的に保持する手だて」(Goffman 1967=2002: 57) となっているからだ。デュルケムが「聖なるもの」と言い表したところの「特別の価値をもっている対象」とは、ゴッフマンの儀礼論においては諸個人の「人格」を指している。

消極的儀礼と積極的儀礼とを区別したデュルケムにならって、ゴッフマンは「回避儀礼」と「呈示儀礼」という分類を行う。前者は、相互行為において相手の個人的領域を侵害しないように(物理的に、あるいは言語的表現のうえで)一定の距離を維持する行動である。後者は、挨拶や称賛、援助などによって相手にたいする尊重を積極的に伝達する行動である。この両者はともに、「相手についての高い評価を適切に当の相手に対して伝える」(Goffman 1967=2002: 56) ための「表敬 (deference)」儀礼であり、自分自身が「まわりから見て望ましい性質をもっている人間であること」(Goffman 1967=2002: 77) を示す「適切なふるまい (demeanor)」とあいまって、相互行為に関与する「人格」の聖性を保護する働きを為すと論じられる<sup>2)</sup>。

## (2) 「相互行為儀礼の過程」モデル

さて、このようなデュルケムとゴッフマンの儀礼論を出発点として、コリンズは儀礼の一般理論（モデル）を構想する。両者の儀礼論においては、儀礼のなかで崇拜される「聖なるもの」として「社会」と「人格」というそれぞれ別の対象が示されている<sup>3)</sup>。そのため両者の接合に際しては、「聖なるもの」の本質を焦点としてさまざまな議論が行われてきた<sup>4)</sup>。

しかし、コリンズは問いの立て方を転換させる。「聖なるもの」の本質が何であるかよりも、むしろそれが儀礼的实践を通じてどのように構築されるのかが探求の対象となるのだ。したがって、あらかじめ存在する「聖なるもの」が「象徴的な仕方規則に従った行為をするように個人を拘束する」（Collins 2004: 17）という儀礼観は退けられ、「聖なるもの」や「連帯」などを産出する儀礼的「過程」にかんする議論として、デュルケムとゴッフマンの儀礼論の要点が再構成される（Collins 2004: 23-5; 33-40）。そこで示されるのが、儀礼の「構成要素」と「結果」からなる因果的分析モデル、「相互行為儀礼の過程」モデルである。

詳しく見てみよう。まず儀礼の開始に要求されるのは、複数の行為者が同一の時間・空間において身体的（＝物理的）に共在すること、そしてその集合と外部とのあいだに一定の境界が存在することである。このような条件のもと、参加者が集合的な行動や出来事に関与することで、「注意の相互的焦点化（mutual focus of attention）」が生じる。これは、特定の事物にたいする注意が、自己と他者とのあいだで共有のものであると間主観的に認知されることによって、それぞれの参加者相互への注意として焦点化される現象である。その際、この集合に共有される何らかの感情的モードが存在すると、「注意の相互的焦点化」とのあいだにフィードバック的強化のサイクルが発生する。つまり、共有のモードが高揚するにつれて注意の焦点化の程度も高まり、それによって共有のモードがさらに高揚する（Collins 2004: 48）。コリンズは、このフィードバック的強化が最高潮に達する状況を、デュルケム儀礼論における「集合沸騰」として理解している。

さて、コリンズ理論においては、上述のような過程を通して産出されるものが「儀礼の結果」として把握される。具体的には、たんなる一時的な「集合」は、儀礼的過程を通過することによって、持続的な「集団」となり「連帯」の感覚を生み出す。その集団的連帯の象徴となる事物が「聖なるもの」である。行為者個人においては、集団への所属にたいする肯定的な意識や、ふたたび儀礼に参加することへの意欲といった「感情エネルギー（emotional energy）」が蓄積される。また、連帯や象徴への侵害を非難する「道徳性」が認識されるようになるという（Collins 2004: 49）。

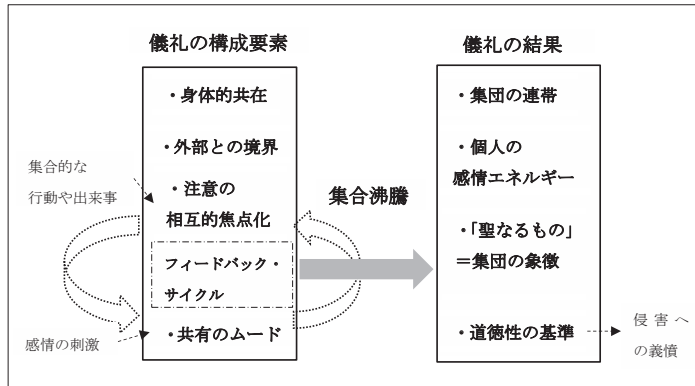


図1：「相互行為儀礼の過程」モデル (Collins 2004: 48をもとに作成)

### (3) 変数の導入

このようにデュルケムとゴッフマンの儀礼論を「過程」の視座から再構成した議論に加えて、コリンズが独自に導入するのが「変数 (variable)」の概念である (Collins 2004: 47)。これは、「相互行為儀礼の過程」モデルにおける「構成要素」や「結果」などの各項目について、それぞれを (量的・質的に) 可変的なものとして把握することで、儀礼の過程全体をより動的に理解しようという試みである。ただし、彼は厳密な数学的モデルを意図したわけではなく、「変数」の概念も比喩的に用いられている。つまり、独立変数 (= 構成要素) に対応する従属変数 (= 結果) は、強弱や大小のような量的な差異だけでなく、質的な差異としても現れることになる。コリンズは次のように述べている。

儀礼は、さまざまなことに利用できる一種の社会的技術である。この機構はさまざまな状況に適用できるので、同じ仕組みが多くの違った結果をもたらさう。(Collins 1992=2013: 92)

たとえば、社交的会話に臨む各人の参加意欲がバラバラであれば (弱い「共有のムード」)、会話は盛り上がりせず (弱い「集合沸騰」)、同じメンバーでの会話は一度限りのものになるだろう (弱い「連帯」)。また、同じ野球チームのファン同士の会話でも、応援する選手が一致するか否かによって (「注意の相互的焦点」の差異)、話題の対象が「チーム」か「選手」かに分かれるかもしれない (「聖なるもの」の差異)。

このような変数の導入は、儀礼の過程の説明に役立つだけではない。次章で論じるように、とりわけ「感情エネルギー」を変数として設定することが、儀礼論から「階層化」論への展開に重要な意味を持つことになる。

## 3. 「相互行為儀礼の連鎖」理論

### (1) 社会学的主題としての「儀礼」と「階層化」

ところで、前章で概観したコリンズの儀礼論はおもに、いくつかの論文をもとに執筆された2004年の著書 *Interaction Ritual Chains* において論じられている。そこで示される「相互行為儀礼の過

程」モデルを中心とした議論を、彼は「相互行為儀礼の連鎖」理論と名付けている。儀礼の「連鎖(chains)」という表現は、儀礼の結果としての「連帯」や「感情エネルギー」が行為者にとって次なる儀礼に参加する動機づけとなり、儀礼が繰り返されていくことを意味している。

じつは、この「相互行為儀礼の連鎖」の概念、および「変数」としての感情エネルギーという論点は、1981年の論文“On the Micro-foundation of Macro-sociology”（以下、「ミクロ的基礎」論文）においてすでに提示されている（Collins 1981: 1001-2）。ただし、この論文の主題は儀礼分析そのものよりも、一般的に「階級」や「地位」といったマクロ社会学的概念を用いて論じられることが多い社会的現象（＝「階層化」）の分析を、相互行為儀礼とその連鎖というミクロ社会学的な視点によって基礎づけることにある。

このように、同じ「相互行為儀礼の連鎖」理論という名称のもとで執筆されてはいるものの、*Interaction Ritual Chains*の儀礼論と「ミクロ的基礎」論文におけるミクロ-マクロリンク論および階層化論は、一見すると各々が独立に論じられているように思われる。実際、この「連鎖」理論に言及する先行研究においても、儀礼理論により関心を持つもの（Stets and Carter 2012）と社会理論により関心を持つもの（Turner 1987; Hilbert 1990）とでは参照の対象が異なっており、コリンズの2つの議論を一体のものとして理解しようとはされてこなかった。

それにたいして本稿は、儀礼論を中心としながら階層化論にも目配りをするように、コリンズの世界社会学を把握する。彼自身が『脱常識の世界社会学』のなかで述べているように、多くの社会学者の探求目標を突き詰めれば「連帯」と「コンフリクト」という2つの主題に行き着く（Collins 1992=2013: 36）。前章で見たように、儀礼のメカニズムが社会的連帯を生み出すというのがコリンズの基本的な認識であるが<sup>5)</sup>、同時に彼は社会的階層やコンフリクトという現象の基礎としても儀礼を位置づけている（Collins 1992=2013: 41）。つまり、コリンズにとってはあらゆる社会学的主題は儀礼論の観点を踏まえて論じられなければならない、彼自身の理論的構想もそれに即したものとなっている。それゆえ、儀礼的連帯を論じる*Interaction Ritual Chains*の論点を踏まえて、「ミクロ的基礎」論文における階層化の議論を検討することは、コリンズ社会学の全体像を把握するとともに、その理論的な有益さを判断することに役立つだろう。

## (2) 階層化の理論——「市場としての相互行為儀礼」モデル

「ミクロ的基礎」論文において中心となるのは、相互行為儀礼を「市場 (market)」に例えるモデルである。コリンズ自身はこのモデルを特に名付けていないので、本稿ではこれを「市場としての相互行為儀礼」モデルと呼ぶことにしたい。前章で検討した「相互行為儀礼の過程」モデルと「市場としての相互行為儀礼」モデルは、コリンズの「相互行為儀礼の連鎖」理論を構成する主要なモデルと言える。

このモデルを用いることでコリンズが明らかにしようとしたのは、行為者が執り行うミクロな相互行為儀礼と、マクロな社会現象である「階層化 (stratification)」とのあいだの相互連関である。先回りして言えば、コリンズは相互行為儀礼を複数の行為者が感情エネルギーを「取引」する「市場」と見ることによって、その取引の結果として現れる行為者間の「所有」と「権威」の非対称な分布を「階層化」のメカニズムとして把握する<sup>6)</sup>。同時に、そのヒエラルキー内部における行為者の位置

が、それぞれの感情エネルギーの蓄積に与える再帰的な作用が論じられている<sup>7)</sup>。

ところで、コリンズの社会学において比喩的に使用される諸概念のなかで、とくに「市場」の概念にもとづく議論は、いわゆる「合理的選択理論」との関係についてなど不明瞭な部分が残されている。それでも、彼の儀礼論と階層化論の接続を確認するという本稿の目的にとっては、以下の数点を確認しておけば十分である。それは、感情エネルギーの取引を行う「市場」には、相手の選択にかんして比較的自由度の高い自発的な相互行為儀礼と、相手の選択に制限があるなかで行われる相互行為儀礼が存在するということである。そして、この2つの種類の「市場」は、結果としてそれぞれ性質が異なる階層化を生じさせるということである。具体的には、前者の「市場」は相互行為儀礼を行う集団（に所属する行為者）と他の集団（に所属する行為者）とのあいだの階層化（＝「外的階層化」）を、後者は集団の内部での行為者間の階層化（＝「内的階層化」）を発生させる。

まずは、自発的に行われる相互行為儀礼「市場」から「外的 (external) 階層化」に至るメカニズムから見てみよう。先に述べたように、この「市場」で取引されるのは、行為者ひとりひとりが保持する感情エネルギーである。彼らは、それ以前に経験した儀礼の結果として、各々がさまざまな水準の感情エネルギーを獲得・保有している。コリンズによれば、行為者は自らと同じ程度の感情エネルギーを保持している者と相互行為儀礼を行うことによって、新たに感情エネルギーを補充することができる (Collins 1981: 1007)。当然ながら相手も同じように感情エネルギーを得ることを期待するので、自由度の高い「市場」においてはそれぞれが保持している感情エネルギーを「元手」として、相互行為儀礼を行う（＝感情エネルギーを取引する）相手が選択されることになる。

たとえば、大学の新生がサークルを選ぶ際に、性格（社会的／引っ込み思案）や外見（おしゃれ／地味）などの面で自分と似たような学生がいるサークルに入るのは、この例と言える。概して、所属する学生の性格や外見の「ポジティブさ」の高低と、そのサークルの「ステータス」の高低は一致することが多い。というのも、サークル内で行われる相互行為儀礼によって、学生たちのもともとの性格・外見の性質がさらに強化されるからである。この一連の過程は、相互行為儀礼「市場」を介した外的階層化として見ることができる。

いっぽう、所与のメンバーで構成される集団においては、相互行為儀礼を介して集団内部の「内的 (internal) 階層化」が発生する (Collins 1981: 1001)。この相互行為儀礼「市場」における取引が、先に取り上げた「自由な」市場における取引と異なっているのは、取引相手の選択の余地が少ないということである。それゆえ、そこでは時に保持する感情エネルギーの水準が異なる行為者同士が相互行為儀礼を行わなければならない。サークルへの参加ほど自由度が高くない状況、たとえば授業のグループワークでは、課題への取り組みやメンバー同士のコミュニケーションに自信のある（＝感情エネルギーが高い）学生と、自信のない（＝感情エネルギーが低い）学生と一緒に作業を行うことが要求される。その結果として、前者の学生が作業進行をリードし、その他の学生がそれに従うというヒエラルキーがグループ内に生まれることになる。さらに、コリンズによれば、集団内の支配的位置にいることは行為者の感情エネルギーを増加させ、逆に従属的位置は感情エネルギーを低下させる。つまり、最初に存在していた感情エネルギーの格差は、相互行為儀礼を通して拡大再生産されていき、集団内の内的階層化が確立されるのである。

#### 4. 小集団過程の分析枠組

##### (1) コリンズ社会学の展開——儀礼理論からマクロ社会学へ

コリンズの社会学は *Interaction Ritual Chains* 以降、ミクロな相互行為儀礼を出発点としてマクロレベルの階層化やコンフリクトを説明する基本的な枠組を維持しつつ、よりマクロ社会的な主題に接近する傾向にある。紙幅の都合上、本稿ではその展開を詳細に検討する余裕はないが、たとえば2011年のアメリカ社会学会会長講演においてコリンズは、国際的な軍事紛争を例示しながら、コンフリクトの発生から激化、そして緩和に至る過程を論じている (Collins 2012)。

このようなマクロ社会的な展開のなかでも儀礼論的視点が維持されるいっぽうで、その分析枠組はこれまで見てきたような「相互行為儀礼の連鎖」理論の一部分をより強調する形に変化してきている。たとえば、[1]「マクロ」概念の巨大化である。もともと、コリンズ理論における「ミクロ」概念の指示対象が、経験的に観察可能な限定された時間・空間として明確化されているのに比べて、「マクロ」概念の指示対象はかなり幅広く設定されている。具体的には、最大の極として空間は「全体社会／国家」レベル、時間は「世紀」レベルが想定されていたが (Collins 1981: 986)、近年の彼の議論はこのレベルに集中しつつある。

また、議論の中心的な主題が、全体社会レベルの社会階層や社会変動となることで、[2]「階層化」にかんする議論の焦点は個別の社会集団内の「内的」階層化よりも、集団間の「外的」階層化に置かれるようになっていく。それに伴って、[3] 儀礼の「市場」モデルについて、すべての行為者が感情エネルギーの釣り合う「平衡点 (equilibrium point)」を目標に、相互行為儀礼への「参入」と「離脱」を自由に繰り返すという想定 (Collins 1981: 1007) を強めている。

コリンズの社会学におけるこのような力点の変化は、マクロ社会的な主題の究明という狙いを前提とすれば十分に理解できる。ただし、彼の理論的営為を再考しようとする本稿では、「市場」モデルで提示された論点を踏まえつつ、「小集団における儀礼の理論」である「デュルケムのミクロ社会学」(Collins 1992=2013: 9) に自らの学的出自を規定するコリンズ元来の視点に、今一度留まって考察してみたい。

##### (2) 小集団の儀礼的メカニズム——儀礼の感情的側面と認知的側面

ここまで見てきたように、コリンズの議論において、儀礼の「過程」モデルから「市場」モデル、さらにマクロ社会学への展開に際して徐々に強調されていったのは、行為者間の感情エネルギーの「自由な」取引という論点であった。それでも、コリンズ理論を全体として見れば、ジョナサン・ターナーが述べるように、「市場」での取引を通して個人的に感情エネルギーを高める回路と、儀礼的集団に所属することそのものを通して感情エネルギーを満たす回路が併存していると理解するのが妥当であろう (Turner 1987: 22)。つまり、有利な取引を求めて誰もが参加できる「自由市場」として相互行為儀礼のイメージは、コリンズ社会学のごく一部に当てはまるものにすぎない。

そもそも、儀礼の「過程」モデルにおいて論じられていたように、儀礼が産出する「結果」には、行為者それぞれの活動を活性化させる「感情エネルギー」だけではなく、行為者を認知的に集団に繋ぎ止める「聖なるもの」が含まれている。相互行為儀礼が行なわれる社会集団には、たとえそれが「自由市場」モデルの性質が強いものであったとしても、集団を維持する原理が作用しているのだ。



それを踏まえるならば、先述の通りコリンズの「市場」概念には曖昧さが残されているとはいえ、外的階層化を生み出す（成員の移動率が高い）集団と、内的階層化を生み出す（成員の移動率が低い）集団の差異は相対的なものであり、多くの社会集団には2つのメカニズムが共存していると言えるだろう。ミクロな儀礼の分析を根本に据えたコリンズ理論が対象として想定していたのは、一義的には、（多少の入れ替わりを含みつつ）一定で少人数の成員から構成される小集団である。儀礼の「過程」モデルが示すように、小集団において行われる相互行為儀礼は、それがどのような性質のものなのか（＝どのような「変数」を示すのか）によって、儀礼の結果として集団の性質を決定していくことになる。

儀礼が「連鎖」していくことによって、集団の性質もさまざまに変動していく。そのような小集団の集団過程（group process）を分析するには、集団の維持と変動に関与する儀礼的要因として「感情的側面」（＝感情エネルギー）と「認知的側面」（＝聖なるもの）の両者を考慮する必要がある。すでに何度も確認したように、それらは別々の変数として示すことができ、同じように変化するとは限らない。もちろん、その両者の強弱が一致することが集団の性質としては一般的であり、コリンズ自身も「感情エネルギー」の増加／減少と「聖なるもの」の強化／弱化的対応を前提とした「儀礼強度（ritual intensity）」に議論を集中させている（Collins 2004: 81-4）。それでも、彼自身が儀礼の感情的側面と認知的側面を別々の変数として把握しうる枠組を提供している以上、それを理論的に応用してみることもコリンズ社会学を再評価する本稿の試みにとって意味のあることだろう。

ところで、コリンズの儀礼理論をもっとも純粋な形態で適用できる対象は、自己目的的に行われる「表出的な」小集団である。そこで、最も親密な表出的小集団のひとつである「恋愛カップル」を題材として分析を試みてみたい<sup>8)</sup>。

### (3) 恋愛カップルの集団過程——儀礼論的分析

恋愛（romantic love）、つまりエロティックな交渉を含む親密な体験は、コリンズ自身によっても儀礼論的説明が行われている<sup>9)</sup>。Interaction Ritual Chainsでは、著書後半の応用編冒頭の章を「性的相互行為の理論」と題して論じている（Collins 2004: 223-57）ほか、『脱常識の社会学』においても、家族社会学的主題を扱う章（「愛と所有」）の半分以上をエロティックな関係の考察に充てている（Collins 1992=2013: 191-245）。それらの議論を引き継いで本節で検討したいのは、小集団としての恋愛カップルの、成立から終焉、あるいは別の関係性への移行という変動パターンである。

その集団過程は、恋愛カップルが行なう「相互行為儀礼の連鎖」によって実現する。ミクロな相互行為儀礼には、カップル間の性行為や親密な会話などが含まれる。それら個々の相互行為儀礼を構成する「注意の相互的焦点化」や「感情的ムードの共有」などの程度によって、結果としての「感情エネルギー」や「聖なるもの（関係の象徴）」などの質・量も様々である。

恋愛現象における感情エネルギーは、相手を恋人として望ましく思う気持ちや相手にたいして抱く性的欲求、カップル継続への意欲やカップルの一員としての自己肯定感などによって量られる。また、関係の象徴としての「聖なるもの」は、恋愛カップルとしての親密性に彩られた共有の現実を喚起するような、プレゼントや思い出の物、場所、記憶、そして互いの身体の「プライベートな」部位などとして現れる。「感情エネルギー」と「聖なるもの」は、小集団としての恋愛カップルを感

情的・認知的に持続させる2大ファクターである。同時に、相互行為儀礼を積み重ねるにつれて、カップル間でこれらの共有の度合いが強化されることもあれば、齟齬が生じることもあるだろう。

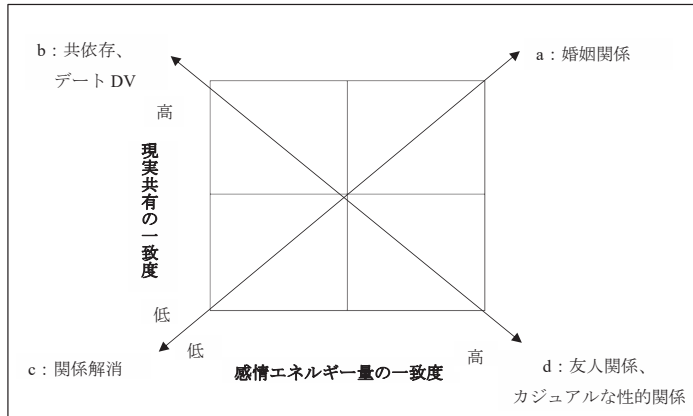


図2：「恋愛カップル」の儀礼論的分析枠組

〔図2〕は、カップル間の感情エネルギー量の一致度（儀礼の感情的側面）を横軸に、「聖なるもの」を介在した恋愛カップルとしての現実共有の一致度（儀礼の認知的側面）を縦軸に配置したものである。恋愛カップルの集団過程はこの座標系のなかでの移動によって示すことができる。さらに図の四隅、つまり両座標軸の「極値」を超えると、この集団は「恋愛カップル」とは別のシステム（あるいは「フレーム」）に移行することになる。

感情・認知の一致度が〔a〕ともに高い場合と〔c〕ともに低い場合は、対の事象として考えられる。恋愛カップルは前者では「婚姻関係」へ、後者では関係の解消（「破局」）に向かう傾向がある。〔a〕と〔c〕を結ぶ直線はカップル間の「儀礼強度」を示している。

また、〔d〕感情的な一致度は高いものの認知的な一致度が低い場合には、カップルは「恋愛」関係としての自己定義を止めて、より緩やかな友人的な関係やカジュアルな性的関係（「セックス・フレンド」）に移行する可能性がある。この場合には、持続的で拘束的な関係性が忌避されるいっぽうで、その都度ごとの相互行為への感情的な期待値は維持されているからだ。

そして、〔b〕感情的な一致度は低いものの認知的な一致度が高い場合には、親密性の病理形態が現れる可能性が高い。極端な場合には、「共依存」的關係や（「カップル間レイプ」を含む）「デートDV」など、一方の側が他方を身体的・心理的に支配する関係性となる。支配する側が高い感情エネルギーを保持するが、その性質は相互的なものではなく支配欲や独占欲、暴力的な性的欲望に変質する。支配される側の感情エネルギーは恐怖や無力感、自己否定感によって消耗される。この類型が前述の3つと比べて特徴的なのは（かつ「実践的に」厄介なのは）、この権力的非対称性が「恋愛」関係の内部として経験されるために、支配される側にとっても離脱の契機が見つけれられない点である。この非対称性は恋愛カップル間の「内的階層化」の程度として、〔b〕と〔d〕を結ぶ直線上に位置づけられるだろう。

## 5. むすびにかえて——コリンズ社会学の方法論

以上、恋愛現象を題材に駆け足でコリンズ理論の応用を試みた。最後に本稿のまとめとして、経験的研究への接続にかかわる方法論的論点について触れておきたい。

儀礼の「過程」モデルなどのコリンズ理論が一見想起させるような、社会学的説明における「因果モデル」の正当性は今日ではかならずしも自明のものではなくなっている。佐藤俊樹が指摘するように、自然科学における「実験室」とは異なって、社会科学ではある事象の「原因」候補の絞り込みに際して、観察者（もしくは観察の対象となる当事者）による意味的な境界設定を用いざるを得ないという限界が存在する（佐藤 2011: 290-1）。

また、経験的研究における「エンピリカルな構築主義」（中河 2005）を唱える中河伸俊は、エスノメソドロジ的なhowの問い（「どのように『現実』が産出されているか」と）と自然主義的なwhatの問い（どんな『現実』が『ある』か）（中河 2001: 34）とを往還するアプローチを主張している。その際に退けられるのは、実証主義的にwhyを問う原因論＝因果モデルである。なぜなら、人々の具体的な活動の流れにおいては、因果モデルの「独立変数」たる先行する行為や出来事は、後続の行為や出来事の「原因」というより、それを理解可能にするために「参照・言及」される対象にすぎないからだ（中河 2001: 38）。

このような批判を前に、コリンズ理論の狙いが果たして儀礼の原因を突き止めることにあったのか否かをまず確認する必要がある。彼自身、社会学のマルチパラダイムの状況における認識論的・方法論的な対立の激化を危惧し協同作業としての社会学を擁護する論考のなかで、「因果性」の概念について述べている。それによれば、この概念にたいする批判の多くは実証主義的なイメージの投影によって為されている。いっぽう彼の理解では、「原因」とは、特定の「結果」の産出にかかわる諸条件の一部分に照射して言及する際に便利な「メタファー」にすぎない。社会学的説明の中心となるべきモデルは、対象世界に「どんな（what）部分が存在し」、それらが「どのように（how）作用しているのか」を描くものなのだ（Collins 1989: 134）。

コリンズの社会学的探求の主眼は、対象となる事物が作用する「過程（process）」にある。あらためて述べるまでもなく、それは「相互行為儀礼の過程」モデルという名前にも明らかである。これが因果モデル的な形式で示されるのは、儀礼が作動する過程を説明するのに有益だからであって、原因論的な狙いからではない。かりにその説明のなかで「『原因』の・ようなものの提示」が為されるとしても、「それはwhatの問いとhowの問いの領分内にある」（中河 2005: 185）。

本稿はコリンズ社会学の理論体系を整理することを通して、その理論的意義のひとつとして（とくに表出的状況における）行為者間の階層化の説明を挙げた。ふたたび性的相互行為を例とすれば、エロティックな行為の諸形態を「性差別主義」や「家父長制」、「資本主義」などの概念から「説明」することをコリンズは拒否している（Collins 2004: 225）。なぜなら、社会的事象をそのような「規範」や「制度」、「文化」などの表現として記述することは、たんにラベルを貼りつけただけで、社会学的「説明」とは言えないからだ（Collins 1989: 134）。コリンズ的な「因果モデル」（本質的には「過程」モデル）は性的不平等について、それがどのように出現するのかを、相互行為を構成する諸要素や過程の観点から説明しようとする。

このモデル・理論の利用は社会学的観察者だけの特権ではない。というのもコリンズが提示した儀

礼モデルは、実際の人々の実感から離れたものではないからだ。性行為にしても社交的会話にしても、表出的相互行為の当事者にはたいてい、そこで生じた「気づまり」や「違和感」の理由に何かしらの「心当たり」があるものである。その「心当たり」を儀礼の概念によって言語化することは、親密な空間における権力的な非対称性を批判する「実践的な」目的にも役立つかもしれない。

### 【注】

- 1) わずかな例として、竹内洋による『脱常識の社会学』の紹介は儀礼論に中心的位置を与えている（竹内 2008: 29-30）。いっぽう流王貴義は同書に言及しつつ、コリンズの所説を「信頼論」として理解しており、前提となる儀礼論を見落としている（流王 2012: 411-2）。
- 2) この「人格崇拜」は、ゴッフマンの著作全体に通底する主題である。たとえば、相互行為の演出論的分析においても、「パフォーマーが自己自身のショーを救うために用いる防衛的措置」と「オーディエンスならびに局外者がパフォーマーのショーを救う……保護的措置」が論じられる（Goffman 1959=1974: 249）。
- 3) デュルケムの議論でも、近代化にともなう人格崇拜が示唆されているが、その根源はここでも社会の聖性に置かれている（Durkheim 1912=1975b: 337-8）。
- 4) たとえば、石黒毅は両者の共通項を「社会の聖性」に見出し、ゴッフマン的儀礼を個人のうちに内面化された社会性（「社会化」）の崇拜として理解する（石黒 1985: 45-9）。また、山田陽子によれば、両者の焦点はともに社会的に基礎づけられた人格崇拜にあり、それがデュルケムにおいては「個人一般の賛美」、ゴッフマンにおいては「フェイスの維持・防衛」として論じられているという（山田 2002: 383-5）。さらに渡辺克典は、デュルケムの継承に際してゴッフマンは「歴史的過程」にたいする戦略的沈黙を選択していると述べている（渡辺 2004: 176）。
- 5) よく知られた『脱常識の社会学』では、社会的連帯について「合理性の非合理的基礎」や「契約の前契約的基礎」という文脈で論じられている（Collins 1992=2013: 2-42）。これまで、コリンズのこの議論はいわゆる「合理的選択理論」に対抗するものとして打ち出されていると受け止められてきた（竹内 2008: 27; 流王 2012: 411）。しかし厳密に言えば、ここでの彼の所説は社会学内部の個別的立場としての合理的選択理論に向けられたものというより、広く外部にたいして社会学そのものの存在意義を訴えたものと理解するのが正確である。つまり、人間の合理性を前提とした「日常生活のいろいろな活動」や「一連の実用的および理論的な学問分野」にたいして、「社会学は、合理性に対するこのような常識的信仰に異議を唱える点で際だった存在である」（Collins 1992=2013: 2-3）ことを示すのが『脱常識の社会学』の狙いと言える。そのうえでコリンズの立場からは、連帯や契約を成立させる「非合理的な」メカニズムを最も説得力をもって説明するのが社会的儀礼の諸理論であることが主張されるのである。
- 6) コリンズの階層化論における概念や視角が、一般的な社会階層論とは若干異なることには注意が必要だろう。たとえば、コリンズが用いる「所有」概念は「所得」や「財産」のような「物」そのものの保有を指すというよりも、特定の「物」をめぐる行為者間の関係の性質に主眼を置いている（Collins 1992=2013: 196）。
- 7) このようなミクロな相互行為儀礼とマクロな社会的事実との再帰的関係の理論化の妥当性が、「行為者性」と「構造」の相互作用を「構造化」として見るギデンズとの潜在的な論争のポイントとなっている（加藤 2021）。
- 8) 恋愛カップルの「形成」過程については、草柳千早がゴッフマン儀礼論を用いて考察している（草柳 1991）。
- 9) これに言及した数少ない論考として、デビッド・ノッターによる歴史社会学的な恋愛研究がある（ノッター 2004: 42-3）。

【文献】

- Collins, Randall, 1981, "On the Micro-foundation of Macro-sociology" *American Journal of Sociology*, 86(5): 984-1014.
- , 1989, "Sociology: Proscience or Antiscience?," *American Sociological Review*, 54(1): 124-39.
- , 1992, *Sociological Insight: An Introduction to Non-Obvious Sociology, second edition*, Oxford: Oxford University Press. (井上俊・磯部卓三訳, 2013, 『脱常識の社会学 第2版——社会の読み方入門』岩波書店.)
- , 2004, *Interaction Ritual Chains*, Princeton: Princeton University Press.
- , 2012, "C-Escalation and D-Escalation: A Theory of the Time-Dynamics of Conflict," *American Sociological Review*, 77(1): 1-20.
- Durkheim, Émile, 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie*, Paris. (古野清人訳, 1975ab, 『宗教生活の原初形態』上・下, 岩波書店.)
- Giddens, Anthony, 1984, *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Cambridge: Polity Press. (門田健一訳, 2015, 『社会の構成』勁草書房.)
- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday. (石黒毅訳, 1974, 『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房.)
- , 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, New York: Doubleday. (浅野敏夫訳, 2002, 『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学 (新訳版)』法政大学出版局.)
- Hilbert, Richard A., 1990, "Ethnomethodology and the Micro-Macro Order," *American Sociological Review*, 55(6): 794-808.
- 石黒毅, 1985, 「儀礼と秩序——初期のゴッフマン社会学における表出の機能論的の微視分析」『現代社会学』アカデミア出版会, 11(1): 30-63.
- 片瀬一男, 2013, 『ライフ・イベントの社会学 [新版]』世界思想社.
- 加藤慶一郎, 2021, 「ランドル・コリンズの社会理論とその意義——『マイクロ/マクロ』概念をめぐるギデنزとの論争を通して」日本社会学理論学会第16回大会報告原稿.
- 草柳千早, 1991, 「恋愛と社会組織——親密化の技法と経験」安川一編『ゴッフマン世界の再構成——共在の技法と秩序』世界思想社, 129-56.
- 中河伸俊, 2001, 「方法論のジャングルを越えて——構築主義的な質的探求の可能性」『理論と方法』16(1): 31-46.
- , 2005, 「『どのように』と『なに』の往還——エンピリカルな構築主義への招待」盛山和夫・土場学・野宮大志郎・織田輝哉編『〈社会〉への知/現代社会学の理論と方法 (下)——経験知の現在』勁草書房, 165-89.
- ノッター, デビッド, 2004, 「純潔の構造——聖と俗としての恋愛」『ソシオロジ』49(1): 39-54.
- 流王貴義, 2012, 「『契約における非契約的要素』再考——有機的連帯における契約法の積極的役割」『社会学評論』63(3), 408-23.
- 佐藤俊樹, 2011, 『社会学の方法——その歴史と構造』ミネルヴァ書房.
- Stets, Jan E. and Michael J. Carter, 2012, "A Theory of the Self for the Sociology of Morality," *American Sociological Review*, 77(1): 120-40.
- 竹内洋, 2008, 『社会学の名著30』筑摩書房.
- Turner, Jonathan H., 1987, "Toward a Sociological Theory of Motivation," *American Sociological Review*, 52(1): 15-27.

- 渡辺克典, 2004, 「相互行為儀礼論の射程——疑似歴史と還元主義を超えて」『現代社会理論研究』14: 173-83.  
山田陽子, 2002, 「心理学的知識の普及と「心」の聖化」『社会学評論』53(3), 380-95.

(かとう けいいちろう 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程)